

# 和紙だより

## 目次

特集「産地今昔 越中和紙の場合」	1
八尾和紙	1
蛭谷和紙	2
五箇山和紙	3
特別寄稿「伝統産業支援の何が問題か？」	3
情報欄 イベント情報 お知らせ	4

## 特集「産地今昔 越中和紙の場合」

越中和紙の名が歴史記述に登場するのは、奈良時代。天平九(七三三)年の正倉院文書、さらに宝龜五(七七四)年の同文書、図書寮解「諸国未進紙並筆紙麻等事」に「越中国紙四百枚」の記述がある。平安時代の「延喜式」(九二七年撰上)にも、「越中国」の名があり、中男作物(税として収める作物)として和紙が記されている。

一九八八年、伝統的工芸品に指定された「越中和紙」は、富山県内の三つの和紙産地の紙を統合した名称である。「おわら風の盆」で有名な八尾町の「八尾和紙」、世界遺産「五箇山合掌作り集落」平村近隣の「五箇山和紙」、下新川郡朝日町の山あいの小さな村落で漉かれてきた「蛭谷和紙」(びるだんわし)の三産地である。富山県和紙協同組合「加入者は現在五社。組合事務所は八尾の「桂樹舎」にあり、トロアオイの共同購入、物産展などの出展、地元観光拠点での共同販売を行っている。

現在、富山県は二〇一四年末の北陸新幹線開通に向けて、観光資源の発掘と整備を行い、点から、線面のルート開発に繋げていこうとしている。この観光資源の中に和紙が食い込み、如何に旅人を惹きつけるかが課題だ。また後継者、産地活性化問題など、どの産地にも共通する事情が当地にも横たわる。

## ■八尾和紙「桂樹舎」・民芸和紙と共に

明治時代の民芸運動の主導者、柳宗悦の眼差しは和紙にも向けられ、その影響は、因州、八尾、琉球の「民芸和紙」に花開いた。これら民芸和紙は一九七〇代の民芸ブームに乗り、和紙の一意匠として定着し今日に至っている。柳宗悦に執心し、芹沢銈介とも親交の深かった八尾和紙「桂樹舎」(従業員二十名) 創業者の吉田桂介さんは齢九七才を迎える今日もご健在。併設の博物館「和紙文庫」の木造瓦葺きの建物は八尾町山間部にあつた小学校を移築したもので、日本の古写経から、和紙の生活用品など展示している趣きある空間だ。息子さんと「富山県和紙協同組合」の組合長でもある泰樹さんにお話を伺う。



### ●売葉の紙から

八尾の和紙は、歴史的には室町時代の二五八二年の文献に出てきます。そばの井田川の上流に野積という地区があり、京都禁裏の料地だったので、楮紙を漉いて京都へ上納した。元禄年間に富山二代藩主の前田正甫(まさとし)公が八尾の山間部の山野草を使った売葉を考え出し奨励しました。和紙作りは野積、大長谷等の農家の冬の仕事として定着し、紙漉き場は何百軒とあつたそうです。明治に入ると機械製紙が入ってきて、手漉き和紙は斜陽になりましたが、ただ売葉分野で少し生きながらへ、八尾の紙問屋や売葉業者へ紙をおさめた。昭和三十年頃までは二百軒ほどの紙漉き農家がありました。昭和五十年頃には売葉さんが全く和紙を使わなくな

り、山間部の紙漉き屋も軒もなくなくなり、今はここだけになってしまいました。

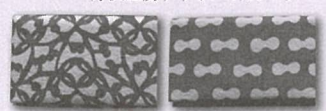
私の父は大正四年生まれで、十二、三才の時東京に出て呉服関係の仕事に就いたが、病気を患い十七才の頃、故郷八尾に帰り療養をしました。その頃八尾は和紙とまゆの街でしたが、和紙が斜陽になっていく中、何とかしなくてはと、昭和十二年に八尾町に富山県製紙指導所が設置され、和紙の技術指導が行われるようになったので、その講習生として申し込んだようです。紙漉きは山間部の職人から、京都の有名な染色文化研究家の上村六郎先生などに植物染めの指導などを受け、次第に和紙の魅力にとりつかれていきました。戦時中は、紙製擬軍や軍隊手帳用の紙、食料袋の紙、風船爆弾の紙まで作つたそうですが、終戦を三十一才で迎え、「二千年の日本文化を担ってきた和紙を建て直して日本文化を守りたい」と地元協力で前身の(株)越中紙社を設立し、楮の色紙の製造を始めました。当時世の中に色紙はないので、京都や東京へ持つていって営業しても、皆さん使い方が分からなくてなかなか買ってくれない。やり続けていると東京の出版業者が本の見開きに使ってくれ、出版畑での需要に道が開けてきました。

### ●民芸思想に感銘を受け

父は、昭和十八年発行の柳宗悦さんの私販本「和紙の美」が「工芸二十八号」に掲載されたのを読んで感激。感動して教えを請おうと、日本民芸館の門を叩くと、先生はいろんな紙を見せてくれ、「君がやるときは伝統の手法をしつかり守つた、昔のような紙をやりなさい。そうすれば間違いない」と言われたそうです。



芹沢工房デザインのカレンダー



定番の連続模様の実からくさとまゆ柄

なり、芹沢先生と出会つたわけですが、最初は紙を供給してもらつていただけでしたが、そのうち八尾でも型染めをしないかということになった。昭和二十六、七年から芹沢工房のお手伝いをさせていただき、カレンダーは先生亡き後も復刻版として二十六年間作り続けています。民芸と言えばこれ、というような先生の特徴的な色使いとデザインはうちの看板商品となりました。

難しかったのは、型染め用の紙です。型染めは水中に三〇分も四〇分も浸けておいて、糊を洗い流しますから、溶けない紙を作らなければならぬ。紙は束になつたら溶けないという性質とコンニャク糊を使つて、染めの技法を考案しました。程なく、自社でもオリジナル模様をデザインし始め、名刺入れ、手提げ袋などの加工品の開発をし、民芸店などで売りました。桂樹舎といえ、コレという模様は特にないのですが、「まゆ柄」や「実からくさ」など連続模様が多いですね。多色刷りはコストがかかりますので、なるべく色数を減らして単色でも魅力ある模様にしていくように心懸けています。

●最近の動き

型染め紙は普通の紙に比べて、値段も高いのですが、とにかく落ちついたきれいな色が信条です。三年前にうちの娘達が郷里に帰ってきてくれ、家業を手伝うようになりまして、商品の色が明るくなってきた。そうすると型染めを知らない若い人が買ってくれるようになってきました。主な市場であった民芸店ばかりでなく、雑貨店、セレクトショップ的な所にも置いて頂けるような新商品も開発しました。ギフトショーにも三年ほど出品していますが、アイテム的にはあまり変えずに、色を明るくしてみたところ、随分取引先が増えました。先日のも（国際文具・紙製品展）でも非常に反応がよかったので少し驚いています。最近の市場は色にとっても敏感ですね。民芸店の減少で売上も落ちましたが、間屋さんを通さずに直販で売ってきたので、まだ生き残れたと思います。そこは道を開いたオヤジの偉いところです。



人名をデザイン化した新作封筒



題のある桂樹舎外観

後継者育成のための人件費に補助が出るという助成金を二年間利用させていただいて、戦力になる人が育ち、継続雇用することが出来ました。自分達が何をやりたいかをはっきり意識していないと助成金も有効に使えませんね。

■蛭谷和紙 川原隆邦さん

「メッセージを伝える社会的紙漉き活動」

富山県朝日町の蛭谷和紙（びるだんわし）は、四百年前、滋賀県永源寺（現東近江市）の山奥、蛭谷から椀などの材料を求めて移住して来た木地師達の冬の仕事として紙造りが定着し、大正から昭和初期には全盛期を迎えた。値段の割に質が高く、紙問屋も繁く出入りし億単位の売上があったという時期には、集落の百三十軒の殆どの家で紙が漉かれた。しかし戦後、洋紙の台頭、生活の洋風化などの影響で、次第にやめる家が増加してきた折、昭和二十八年の大火事で殆どの紙屋や共同作業場も消滅。その後伝統を絶やしてはいけないと二軒だけが五、六〇年、紙を作り続けた。米丘寅吉さんの奥様、奥様亡き後は寅吉さんが六十歳から、独学で細々と紙を漉いてきた。二〇〇三年、両親の実家にほど近いこの蛭谷にふらりと若者がやってきて、寅吉さんに技術の手ほどきを受け、師の亡き後、漉き場を引き継ぐ事となった。転勤族で、インドネシアや千葉に暮らしたこともある川原隆邦さんは、かつてはサッカー強豪校の選手で、青春時代は苦しい練習に明け暮れた。途絶えそうな蛭谷和紙に若い後継者が出来たと、多くの地元メディアでも取り上げられ、川原さんは一躍、時の人となる。しかし川原さんのスタンスは、いわゆる後継者不足に悩む伝統工芸関係者の期待するところとは少し違う。

●暮らしの見直しを紙漉きで

伝統産業は物を作るより売るのが難しい。僕の作っている生成りの生漉き楮紙は、基本的に余り流通するものではないので、今は個人的

なネットワークで注文生産です。元々和紙は、夏、農作物を育て、冬に紙を漉くという具合に半農半工のスタイルで漉かれ、地域で消費されてきましたが、現在は基本的には売れないものです。

最近、僕は活動の拠点を朝日町から富山市に移して、この楮の苗を増やし、市内の呉羽丘陵のファミリーパークでの植樹活動や里山整備活動に紙漉きを利用してしています。富山市は環境未来都市に指定されており、地域再生も大きな課題です。地産地消の意味で、富山で漉く紙の原料は富山で供給したいので、出来上がった楮を八尾の方で引き取ってもらう話などもしています。今グローバル化で地域の産業が、国内だけでなく世界レベルの競争にさらされ、ことごとくおかしくなっています。僕は地域再生が先決だという思いが強くあつて、無くしてしまった里山の知恵や物質主義的な生活の見直しを見つめ直す手段の一つとして「和紙」を捉えたらどうかと考えています。

●和紙と心中するな

とは言うものの、けっこう紙にはこだわりもあり、紙を漉く冬の良い時期だけは逃したくないとか、どこまで薄い紙を漉けるかと技術的な挑戦はやつています。なくなつた寅吉のオヤジさんは、戦争に行つて、時代が激変し、大変な時代を生きてきた人だと僕などは思うのですが、そんな人が「お前らの時代はスピードが明らかにおかしい。大変な時代じゃのう」と言っていました。ただ「和紙と心中だけはする



な！」と言っていて、なるほどなあと。紙漉きをやるやめないというのはどちらでもいい話で、生きて続けていけば、それはやめたことにはならない。それより地域がダメになったら本当に全部ダメになってしまう。

楮の植樹事業が大事な点は、いくら紙見せたところで、「いい紙だね」で終わるけれども、一緒に木を植えて、紙の材料や技術の話ができれば、それだけメッセージを伝えることが出来る。今、ひとつの学校と試験的にやつている試みですが、生徒が漉くのではなく、先生が卒業証書の紙を漉いて出してあげる。先生に一通り教えると、図工の授業の時に先生がスムーズに紙漉きを教えられる。そういう学校を増やしていくつて、先生が勤続十五年くらいになれば、その人はもう紙を十五年くらい漉いているわけです。結果的にりっぱな後継者なわけですから、結果的に育てるより、視点を変わらせた方がいい。大変な産業のつなぐだけの後継者を無理に育てるより、視点を



呉羽丘陵での植樹活動や和紙漉きワークショップ、等身大動物シニアズの様子



小学校の先生に教えている取組の様子

えてみたらどうかと。いわば「社会的紙漉き活動」モデルができたかなあと思っているところです。

■農事組合法人「五箇山和紙」  
「商品開発の悩み」

世界遺産「五箇山合掌作り集落」近隣で漉かされてきた五箇山和紙は、四百年前、江戸時代に中折紙（半紙の一種で、二つに折って懐中に入れて、鼻紙等に用いた）を当時の管轄である加賀二代藩主、前田利長公に収めたという記録が残る。障子紙、書き物、神社仏閣用に幅広く使われた楮の耳付き八寸紙（八寸×一尺二寸）は、加賀藩のオリジナルサイズで、障子の棧も紙に合わせた寸法であったという。今ひとつの用途が、塩硝（煙硝）製造用の和紙で、火薬の製造秘密がもれないように人里離れた周辺の村落で漉かれ、年貢の代わりに献上された。

明治に入ると加賀藩指定産物の保護政策を断られたが、明治期後半には製法に改善を加え、持ちこたえた。終戦後は、紙漉きはすたれていたが、荒廃した郷里に産業を興さねばと有志が集まり、やはり残った案は和紙だった。早速、山に横穴を掘り、そこから紙漉きの水を採った。

現在、「道の駅たいら」近くには、県の資金で運営される観光施設「五箇山和紙の里」（和紙工芸館、和紙体験館敷設）の他、私企業では、桂離宮の障子紙をはじめ、重要文化財の補修用に使われる「悠久紙」を造る、東中江地区の「東中江和紙加工生産組合」、下梨地区の今回お邪魔した「農事組合法人五箇山和紙」（従業員七人）の二軒、合わせて三軒の漉き場がある。



伝統工芸士で「五箇山和紙」を経営する代表理事の前崎真也さんにお話を伺う。

●多様な特注に対応できる紙塑民芸品

昭和四十年代から相倉集落で民宿をやる所ができた、ぼちぼち観光客が来るようになり、昭和三十二年にこの加工施設を補助金で建て、それからいろんな紙加工品を作るようになり、産業奨励館で紹介して頂いたアドヴァイザーやデザイナーの助言で、紙塑民芸品を始めました。最初は、もったいない精神で、紙の切れ端などの損紙を貯めておいて、もう一回煮て、ビーターにかけ、溶かして、粘土状にし、デンプン糊などを入れて、型などもなく全部手で作っていました。今はシリコンの型でやっていますが、彩色や絵付けは一つ一つ手で描いています。

今作業している信長、秀吉、家康のお面なども、本を参考にしながら自分でデザインしながら自分でデザインしました。店にある商品は回りの方のアイデアをヒントにして、大体私がデザインしたものです。全国の観光地などで土産物として売られている紙の置物やご当地オリジナルキャラクターなどの注文もあります。立体に紙を加工する技術と小回りの利く商品対応が重要です。立体に紙を加工する技術



オリジナル紙塑民芸品  
こきりこ人形

品だったので、立体の和紙製品だったら「五箇山和紙」に相談してみよう、という特注需要の定評が付くといいますが…

●商品開発には悩みが多い  
原料は裏の山で栽培している楮と、足りない分はタイ楮

■特別寄稿 「伝統産業支援の何が問題か？」-TRECの取組

前田一樹（富山大学芸術文化学部教授）  
私の勤める富山大学芸術学部のある高岡は、かつて加賀藩の職人を多く住ませた町で、銅器、漆器、仏具を始め、伝統産業が伝承されている地域である。しかし多分にもれず、県内の伝統産業は苦戦を強いられており、富山の越中和紙も例外ではない。原因は経済不況のせい



内、越中和紙も例外ではない。原因は経済不況のせい

いばかりではなく、伝統産業の支援態勢や仕組みにも原因の一つがある様に予感してきた。今回の和紙だよりの特集「産地今昔・越中和紙の場合」の企画を聞くに及び、通底する問題を確認する意味でも、現地取材の案内役を買って出た。

富山大学芸術文化学部では、現在、文部科学省の産学官連携戦略事業「伝統技能の現代化を目指すデザイン・知財のマネージメント戦略」通称「TREC」プロジェクトを進めており、今年で最終年度の五年目を迎える。この目的を一言で言うと伝統的技術の知財化と現代化を推進し、「食える伝統産業」の実現と、日本の伝統工芸職人の文化的価値をグローバルに広める事にある。その手段として地域が有する職人の「技のブランド化」を目指し、産学官連携組織強化と、技のブランド化推進委員会の設立を目指している。

●助成事業の問題点

ここ二十年余り、伝統産業の活性化を目的に、産学官の支援策や助成事業が行われ、多く利用されてきた。新商品開発、販路開拓、後継者育成を三本柱とした毎年の助成金は伝産関連だけでも十億にも昇るといふ。ところが、商品開発をしても、その商品が売れたのか？また売れないとしたら何が失敗であったのか分析し把握され、次のステップで新たなプロジェクトに活かされる事は少なく、助成金がなくなれば、また元の木阿弥、もしくは次の助成を当てにしている申請合戦で長い目で見た戦略的動きにはほど遠い。海外の見本市に出展するケースも増えているが、商談にまでこぎ着け、実際の利益を生むまでには至っていないのが実態であろう。後継者問題も販路開拓も実は

商品開発と同時並行して取り組まねばならないが、それ以前に、プロジェクトに参加する人達の勉強不足や意識の方向の違い、理解不足もあり、システムが相互に有機的に働いていないのも原因の一つに上げられるだろう。

### ●各々の足りない部分は？

職人は、産地の外に出る機会も少なく、行政や問屋、デザイナーからの依頼を待っている事が多く、ましてや自らの関わりのある製品に対してその背景等の全体像を把握しているわけではない。今日の経済活動の中ではコストの制限から効率を重視したものづくりが目がいきやすく、職人自らが新たな流通システムや、マーケット戦略を思考する事は従来の問屋システムの中では考え難い。

助成をする側の行政は、現場とは遠く、職人の手業や心情に直接触れる機会も少なく、理解が薄いこと、仕事の内容まで深く見知っている人脈も薄いため、マッチングも当たり障りのない通り一遍の紹介となりがちだ。これでは伝統産業の活性化への解決策としては不十分ではないだろうか。

伝統工芸とは地域・風土が生み出した多様な価値に他ならないが、デザイナーやコンサルは、いわば都会からの通過者で、工芸の本質的価値や工芸に関わる生活世界の実態を見極められず、観念的な一般論に終始する傾向もある。また固有の価値に気付いているやう気のあるデザイナーがいても、地域の閉鎖性やコミュニケーション不足から意志の疎通が十分に行なう事が出来ない。

一方、幼い時から余り伝統工芸品に接する機会のない都会の消費者の、この分野における

知識や審美眼は落ちるばかりである。本当に良いモノとは何か？その価値を知る目利きの人が少なくなっている事も事実である。実用品ではない「高い」工芸品は馴染みのない美術品となっている。自国の優れた工芸技術を教える教育はあるが、その価値の現代化、拡大を教える教育はさほど行われていない。

### ●On the project training a Win-Win

それぞれの立場で「筋縄ではいかない」という問題は、様々な産業のみならず学術的研究やその応用などの分野でも共通した課題となっている。一方で今ほど日本の「伝統文化・ものづくり」がワールドワイドに長く注目されている時期はないだろう。この十年で伝統産業が生き残れるかどうかが決まると言っても過言ではないと私は考えている。

TRECでは、関係者が仕事をやりながらそれぞれ考え、目標を達成する On the job (project) training の手法と様々な立場の人が共に益する資源開発、コンセプト開発を試みながら「新しい伝統の価値化を創り出し、ビジネスを試みる」という意気込みが形成できれば、と考えている。大学は、組織の運営や科学的知恵の提供、人・モノ・情報の交通整理などを担う。五年計画は、高岡の銅器を媒介として「金属と音」をテーマとしたパイロットプログラムの実行を掲げており、大変具体的な内容となっている。この具体性こそが「地域固有の伝統産業」「地域の大学の役割」「地域の産業施策」を新たなフェーズへ導く手段であると考えている。

誌面の都合上、詳細はここでは語れないが、皆様の参考になれば幸いである。

TRECプロジェクト→<http://trec-net.jp/>

## 情報欄

### ●イベント情報

#### ■平成24年度「伝統的工芸品月間国民会議全国大会・石川大会」関連

・第29回伝統的工芸品月間国民会議全国大会(記念式典)

時:平成24年10月31日(水) 14:00~15:00

場所:小松市 こまつ芸術劇場うらら

・第31回全国伝統工芸士大会

時:10月31日(水) 15:15~17:15

場所:小松市 こまつ芸術劇場うらら

・第31回全国伝統工芸士大会 懇親会

時:10月31日(水) 18:30~20:30

場所:山代温泉「ゆのくに天祥」もしくは  
栗津温泉「辻のや花乃庄」

・2012伝統工芸ふれあい広場合同開会式

時:11月1日(木) 9:45~10:00

場所:金沢市 しいのき迎賓館

・シンポジウム「フランス・エルメスとの連携」

時:11月1日(木) 13:00~15:00

場所:金沢市 しいのき迎賓館

・第15回日本伝統工芸士会作品展

時:11月1日(木)~4日(日) 10:00~17:00

場所:金沢市 金沢21世紀美術館

・伝統工芸ふれあい広場・全国くらしの工芸展

時:11月1日(木)~4日(日) 10:00~17:00

場所:金沢市 しいのき迎賓館

※越前和紙は「墨流し体験」で参加します。

#### ■第20回和紙文化講演会「和紙に美と技を求めて一加飾紙の世界」

時:2012年11月25日(日) 10:00~17:00

場所:昭和女子大学グリーンホール(東京都世田谷区太子堂1-7-57)

入場料:3,500円<機関誌『和紙文化研究』20号(1,500円)を含む>

申込:参加費を11月15日(金)までに、下記口座に振り込む。

振込先口座00170-8-402506 和紙文化講演会

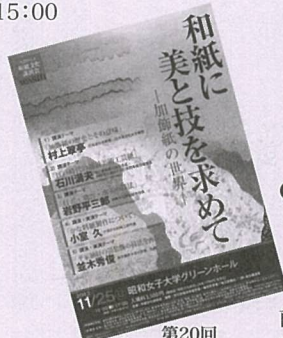
詳細:和紙文化研究会まで <http://www.washiken.jp/blog/>

※加飾紙の歴史や技法を紐解き、その意義と魅力に迫ります。

越前和紙からは、岩野平三郎さんと石川満夫さんが講演します。

#### ●平成25年青年部カレンダー制作

毎年、越前和紙青年部会が抄造技術習得のため実施しています「カレンダー」制作が始まっています。今年は型も自分達で作り、それを使つての流し込み技法による模様紙を計画中です。開始直後に見舞われた「越前市東部集中豪雨」で作業は中断しておりましたが、ようやく9月から再開し、11月の完成を目指しています。



第20回  
和紙文化講演会

#### ●お礼とご報告

7月20日の平成24年越前市東部集中豪雨では、越前和紙産地は甚大な被害を受けてしまいました。お陰様で行政をはじめ多くの方々の励ましを受け活力を取り戻しつつあります。この場をお借りしまして御礼を申し上げますとともに、今後とも変わらぬご支援をお願い申し上げます。

#### 編集後記

久しぶりに「産地今昔」を特集してみました。如何でしょう？先日2回目を迎える、ルーブル美術館と日本の紙修復関係者のコラボ研究会「日本とフランスにおける手漉き紙の技術～その理解、使用、保存」に参加した。フランスの伝統的紙漉きの乾燥工程やゼラチン・サイジングなど、興味深く聞きました。(よ)